

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の2年目)

1. 研究課題

文化資源と文化運動

Cultural resources and cultural movements

2. 研究代表者氏名

菊地 暁

KIKUCHI, Akira

3. 研究期間

2023年4月-2026年3月(2年目)

4. 研究目的

「文化資源」は「資源ごみ」に例えられる。「資源ごみ」は「ごみ」には違いないが、何らかの利用可能性を見出されるが故に、収集分類され処理再活用される「資源」である。同様に、「文化資源」も、さしあたり用途不明かもしれないが何らかの利用可能性を見出され、それゆえに対象化（収集、分類、保管、公開、再活用等々）がなされる文化的事物と捉えることができる。そして「文化資源」への関心を前景化させている一大要因が、デジタル・トランスフォーメーションと呼ばれる社会のドラスティックな変革であり、その一端としてデジタル・ヒューマニティーズの展開である。以上のような問題意識に基づき、大学資料、学校資料、出版資料、写真資料など、個別具体的な資料群の分析に基づきつつ、そのような資料群を産み出し、受け継ぐ「文化運動」の実態を解き明かしていくことが、本共同研究の目的となる。

Cultural resources' can be likened to 'resource waste'. Resource waste is a resource that is collected, classified, treated and recycled because it has some potential for use, although it is still waste. Similarly, "cultural resources" can be regarded as cultural objects for which there is no known use at the moment, but which are found to have some potential for use and are therefore objectified. And one major factor that has brought interest in 'cultural resources' into the foreground is the dramatic transformation of society, known as digital transformation, and one part of this is the development of digital humanities. Based on the above awareness of the issues, the aim of this joint research is to reveal the reality of the 'cultural movement' that produced and passed on such materials, based on the analysis of specific individual materials, such as university, school, publication and photographic materials.

5. 本年度の研究実施状況

文化資源の収集・保存・分析・活用を「文化運動」という観点から再考する本研究班は、今年度は、2025年に生誕150周年を迎える柳田國男とその研究活動にまつわる文化資源について、いくつかの予備的な研究会を実施した。また、日本民俗学会主催国際シンポジウム「スマホ時代の歩き方」(8月24日、神奈川大学みなとみらいキャンパス)に協力し、誰もがスマホという記録・通信デバイスを携帯する時代にあって、文化資源の収集と活用はいかにあるべきかという問題を、中国、韓国、日本の専門家を交えて討議した。このほか、京都市左京区に関する文化資源の収集・整理事業、震災後の能登半島における文化資源の調査事業に協力した。

6. 本年度の研究実施内容

2024.4.26 柳田國男生誕150周年に向けて1 発表者 菊地暁 コメンテーター 高木史人
武庫川女子大学

2024.5.23 柳田國男生誕150周年に向けて2 発表者 菊地暁 コメンテーター 矢野敬一
静岡大学

2024.12.5 柳田國男生誕150周年に向けて3 発表者 菊地暁 コメンテーター 真鍋昌賢
北九州市立平和のまちミュージアム

2025.3.14 柳田國男生誕150周年に向けて4 発表者 菊地暁 コメンテーター 真鍋昌賢
北九州市立大学

7. 共同研究会に関連した公表実績

日本民俗学会主催国際シンポジウム「スマホ時代の歩き方」(8月24日、神奈川大学みなとみらいキャンパス)に協力し、誰もがスマホという記録・通信デバイスを携帯する時代にあって、文化資源の収集と活用はいかにあるべきかという問題を、中国、韓国、日本の専門家を交えて討議した(本共同研究班は協賛団体の一つとして参加)。

8. 研究班員

所内

菊地暁、藤野詩織

学外

矢野敬一(静岡大学)、高木史人(武庫川女子大学)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数				延べ人数			
		総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)
			(40歳未満)	(35歳以下)	(0)			(0)	(0)
人文研所属 (内女性)	1	1	0	0	0	0	5	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
京大内 (人文研を除く) (内女性)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
国立大学 (内女性)	1	1	0	0	0	0	5	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
公立大学 (内女性)	1	1	0	0	0	0	5	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
私立大学 (内女性)	1	1	0	0	0	0	5	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
大学共同利用機関法人 (内女性)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
独立行政法人等公的研究機関 (内女性)	1	1	0	0	0	0	5	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
民間機関 (内女性)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
外国機関 (内女性)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
その他 ※ (内女性)	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
計	5	5	0	0	0	0	25	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)

※「その他」の区分受入がある場合
具体的な所属等名称を記載：例）高校教員
無所属の場合は機関数0とカウントし、この欄の記載不要

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

なし

11. 本年度共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

	研究書の名称	編著者名	発行年月	出版社名	国際共著
1	書いてみた生活史—学生とつくる 民俗学—	菊地暁（編）	2024.10	実生社	

12. 博士学位を取得した学生の数

なし

13. 次年度の研究実施計画

文化資源の収集・保存・分析・活用を「文化運動」という観点から再考する本研究班は、

昨年度に引き続き、京都市左京区に関する文化資源の収集・整理に取り組むほか、民俗学運動を中心とした学術資料の整理・分析、生活史資料の収集・整理、ネット時代の地域文化資源に関する方法論的検討などを実施する予定である。

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

文化資源の収集・保存・分析・活用を「文化運動」という観点から再考する本研究班は、対象の性質上、公開スタイルも多様なものにならざるをえないと考えているが、資料集やワークショップ報告書といった形での成果公開を考えている。